
中間態構文における寄生空所認可に関する一考察

中村 典生

1. はじめに

Keyser & Roeper (1984) (以下K&R) では、GB理論¹の枠組みで、能動態 (active voice) と受動態 (passive voice) の中間的性質を持つ構文である、中間態構文 (middle construction)²の分析が試みられている。(1)が中間態構文の例である。

- (1) a. Bureaucrats bribe easily.
b. These toys assemble rapidly. (K&R (1984: 384))

(1)には、動詞が単純現在形であるという能動態の特徴がある反面、主語位置には受動態同様、主題 (theme) (あるいは被動者 (patient))³の項があり、意味的にも「官僚は簡単に買収される(できる)」と受動的な意味になるという特性がある。

中間態構文には、この他にも様々な特異性が見られ、上述のK&Rをはじめ、多くの研究者たちが分析を試みてきた。その中で、Massam (1992: 133)は、中間態構文が寄生空所 (parasitic gap) を認可する可能性があることを指摘している。寄生空所とは、A' 移動によって残された A' 痕跡 (*wh* 痕跡など) が存在するときのみに生起可能で、まるで A' 痕跡に寄生しているような振る舞いをする空範疇のことである。(2a)が *wh* 痕跡と共起する典型的な寄生空所の例であり、(3)は A' 移動のひとつである空演算子 (empty operator) の移動を含むと考えられている *tough* 構文内で生じる寄生空所⁴、(4)が中間態構文におけるその例である。(2-4)の文中で、寄生空所は *e* で示されており、*t* は移動の痕跡を、下付きの *i* は同一指示を表している。

- (2) a. What_i did you file *t*_i before reading *e*_i?
b. *The papers_i are filed *t*_i before reading *e*_i.
(3) a. This book_i is easy to read without liking *e*_i.
b. These articles_i are easy to file without reading *e*_i.

(cf: Massam (1992: 129))

- (4) a. ?This wall_i paints beautifully without double-coating *e*_i.
b. ?Chickens_i kill pretty easily, even without tranquillizing *e*_i first, but elephants sure don't. (ibid.: 133)

(4)には、やや容認度が下がる？がついているが、ここではむしろ、非文 (ungrammatical) とはならず、容認が可能である点が強調されていることに注意したい。

本稿では、まず中間態構文と寄生空所に関する先行研究を概観することによって、これらの特性を明らかにした後、上述の Massam(1992)の議論に反して、(4a-b)は寄生空所を含む構文ではないことを論ずる。(なお紙面の関係上、以降、細かな語句説明は最低限にとどめるものとする。)

2. 中間態構文について

序章で述べたように、中間態構文は能動態、受動態の中間的な性質を有する構文であるが、中村(1994a: 83-91)では、先行研究をふまえ、この構文のその他の特性についてまとめられている。以下にその主なものを示すことによって、中間態構文の記述的特性について概観する。

まず述べられているのは、中間態構文を構成する中間動詞 (middle verb) の特性である。動詞 *bribe*, *drive* は、通常、(5a)(6a)のように主語位置に動作主 (agent), 目的語位置に主題 (theme) という2つの項をとる他動詞であるが、中間態構文を形成する際には、自動詞として用いられる。そのとき、主語位置に生じるのは、他動詞用法では目的語の位置に生じる主題の項である⁵。

(5) a. The man bribed the bureaucrat easily.

b. Bureaucrats bribe easily.

(6) a. We can drive the car smoothly.

b. The car drives smoothly.

次に、中間態構文では、ほぼ義務的に副詞要素が現れることが述べられている。副詞要素を削除すると、(7b)(8b)のように非文となる⁶。(文頭の*は非文 (ungrammatical) を表す)

(7) a. The book reads easily.

b. *The book reads.

(8) a. Cotton washes easily.

b. *Cotton washes.

中間態構文の意味的な特性としては、必ず表面には現れない不特定の動作主 (implicit agent) の含意があるということがあげられている。例えば、(9a)は(9b)のような意味を持つ。

(9) a. The book reads easily. (= (7a))

b. People, in general, can read this book easily.

つまり、(9a)は「誰が読んでもその本は簡単に読める」という意味となり、「この誰が読んでも」の「誰が」が不特定の動作主にあたる。

この不特定な動作主の含意により，中間態構文は総称的な意味を表す構文となることも言及されている。したがって，特定の出来事の記述に中間態構文を用いることは困難である。

- (10) a. ?Yesterday, the mayor bribed easily, according to the newspaper.
b. ?At yesterday's house party, the kitchen wall painted easily.
(cf: K&R (1984: 384))

以上が中間態構文の主な記述的特性である。次章では，寄生空所の特性について考える。

3. 寄生空所について

序章で述べたように，寄生空所とは，A' 移動によって残された A' 痕跡が存在するときのみに生起可能で，まるで A' 痕跡に寄生しているような振る舞いをする空範疇である。典型的な例としては，*wh* 痕跡に寄生して生じる次のような例がある。

- (11) Which article_i did John file *t_i* [without reading *e_i*]?

(11)の寄生空所 *e* は，(12)が非文となるので，[]で示した付加詞 (adjunct) 内から *which article* が抜き出された痕跡ではあり得ない。

- (12) *Which report_i did John go home [without reading *t_i*]?

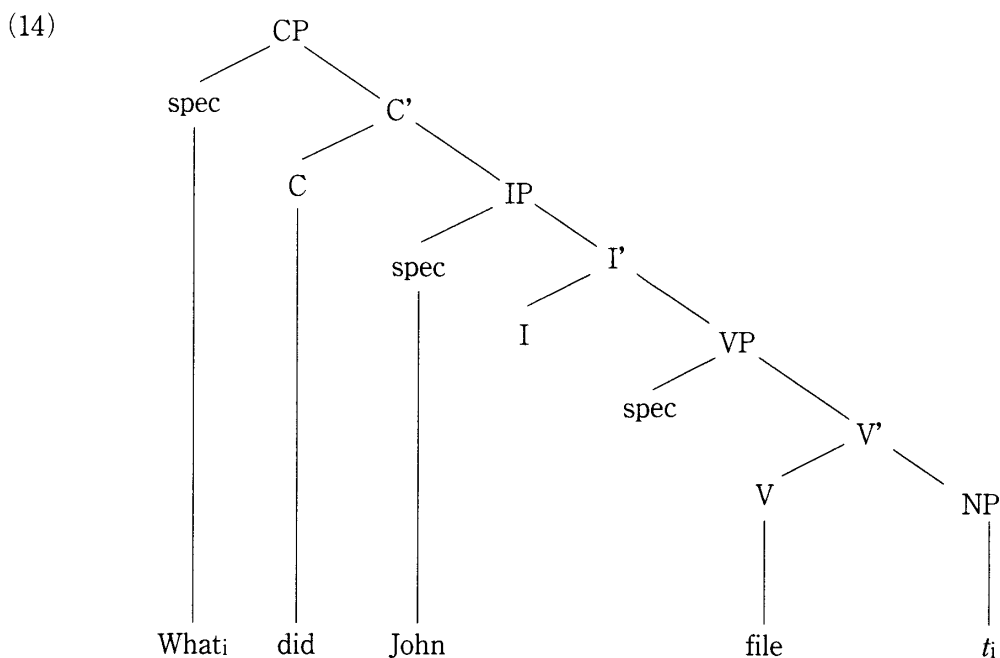
また，(2b)でも示したように，受動態などの A' 移動を含まない文中では，寄生空所は生じない⁷。

- (13) *These articles_i were filed *t_i* [without reading *e_i*]?

以上が寄生空所の主な特性である。以下では，この寄生空所のふるまいが生成文法，特に GB 理論の枠組みでどのように説明されてきたかを概観する。

3.1 Engdahl (1983)

生成文法研究の大前提は，人間言語には構造があり，すべての文法現象はこの構造に基づいて規定されるということである。例えば，GB 理論の枠組みでは，*What did John file?* は，基底で目的語位置にある *what* が，(A') 移動を受け，表層では CP 指定部の位置に生じる，次のような構造を持つと考えられている。



Engdahl (1983)はこの構造に基づき、寄生空所認可の条件として、寄生空所は A' 痕跡に c 統御 (c-command) される位置にあってはならないという、反 c 統御条件 (anti-c-command condition) を提案している。これは次のような例から導かれたものである。

- (15) a. Who_i did you hit t_i [because you like e_i]?
 b. *Who_i t_i met you [before you recognized e_i]?

(15a)は目的語の位置に *wh* 痕跡がある例であり、(15b)は主語位置に *wh* 痕跡がある例である。[]で示した寄生空所を含む付加詞は、IP 付加詞なので、(15a)のVP内にある *wh* 痕跡は、構造上高い位置にある寄生空所を c 統御することはできない。一方、(15b)においては、IP の指定部 (spec) 位置にある *wh* 痕跡が、寄生空所を c 統御するので非文となるという説明である。

しかし、この反 c 統御条件に対して、Contreras(1984)で反例が示されたため、Engdahl の説明は、寄生空所の認可条件としては不十分であることが明らかになった。そこで登場したのが Chomsky(1986a) の連鎖合成分析 (chain composition analysis) による寄生空所の説明である。次節ではこの Chomsky(1986a) の議論を概観する。

3.2 Chomsky (1986a)

Chomsky(1986a) では、寄生空所が *wh* 痕跡などと同様に、変項 (variable) の特徴を示し、また、下接の条件 (Subjacency Condition), 空範疇原理 (Empty Category Principle = ECP) などにしたがうことから、寄生空所は空演算子が移動した痕跡であると分析している。この議論にしたがえば、(16a)は(16b)のような構造を持つことになる。(op が空演算子を、矢印が移動を表す)

- (16) a. What did you file before you read?
 b. [_{CP}What_i did [_{IP} you file _{t_i} [_{PP} before op_j [_{IP} you read e_j]]]]?
-

(16b)には2つのA'連鎖 (A'-chain), つまり, *what* の移動によって生じたA'連鎖と, 空演算子が移動することによって生じたA'連鎖 (empty operator chain) が存在することに注意されたい。Chomsky は, これら2つの連鎖において, 演算子である *wh* 句が移動した痕跡と, 移動した空演算子が0下接 (0-subjacent) であるとき (つまり両者の間に障壁 (barrier) が介在しないとき), 2つの連鎖が合成され, また, このような連鎖が合成されたときのみ, 寄生空所が認可されると述べている。例えば, (wh_i t_i), (op_j, t_j) という2つの連鎖がある場合, (16b)と同じ構造を示している(17a)のような場合に, 連鎖合成が可能である。

- (17) a. (wh_i, t_i) (op_j, t_j) (t_i と op_j は0下接) → (wh_i, t_i, op_i, t_i)
 b. (op_j, t_j) (wh_i, t_i) → * (op_i, t_i, wh_i, t_i)
 c. (wh_i (op_j, t_j) t_i) → * (wh_i, op_i, t_i, t_i)
 d. (op_j (wh_i, t_i) t_j) → * (op_i, wh_i, t_i, t_i)

以上が Chomsky (1986a) で示された寄生空所認可に関する議論の概略であり, 現在の所, この分析をくつがえすような強力な議論はみあたらない。

しかし, Chomsky のこの連鎖合成分析にも弱点はある。寄生空所には, 付加詞内に生じる寄生空所 (adjunct internal parasitic gap) と, 主語内に生じる寄生空所 (subject internal parasitic gap) があり, Chomsky の方法では主語内の寄生空所については説明できないのである。次節では, 連鎖合成分析で主語内寄生空所を説明する可能性を示した, 中村 (1994b) の議論を概観する。

3.3 中村 (1994b)

主語内寄生空所を認可する典型的な動詞は, 心理動詞 (psych-verb) である。心理動詞を含む文には, この主語内寄生空所を認可することの他にも, 逆行的束縛 (backward binding) と呼ばれる束縛現象がみられることや, 弱交叉効果 (weak crossover effect) が欠如していることなど, 多くの特異性が見られる。これら, 心理動詞を含む文に見られる特異性について, 中村 (1994b) は, 経験者繰り上げ仮説 (experiencer raising hypothesis) を採用することによって説明を試みている。以下に, 主語内寄生空所認可に関する中村の議論を概観する。

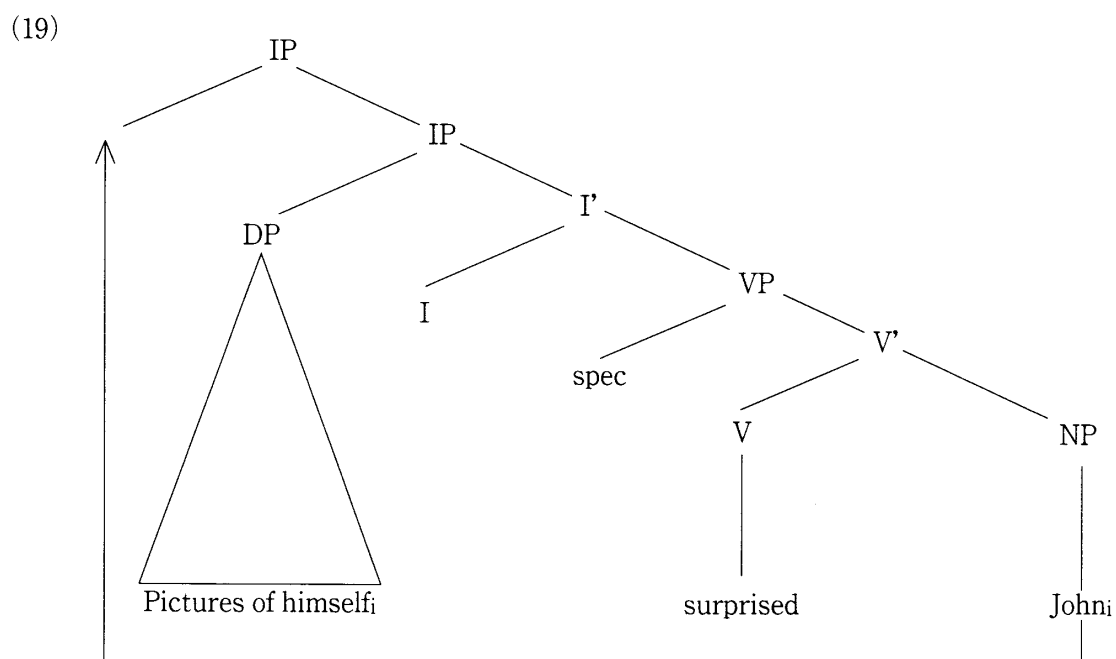
主語内寄生空所の例としては, 次のようなものがある。

- (18) a. Who_i do pictures of e_i bother t_i?
 b. Who_i did friends of e_i surprise t_i? (cf: Johnson (1985))

日本語に直せば, (18a)は「誰_iの写真が(誰_iを)わずらわせたの」となり,「誰の写真」の「誰」と「(誰を)わずらわせたの」の「誰」は同一人物を指示する。

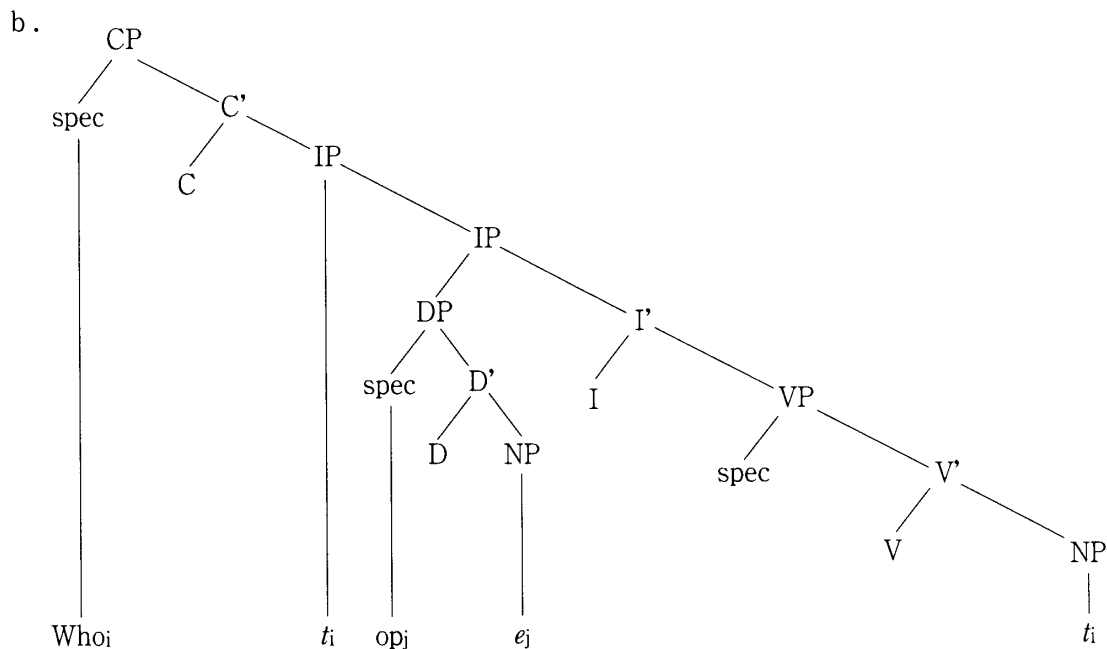
さて, 寄生空所を空演算子の移動した痕跡であると仮定し, Chomsky の連鎖合成分析で(18)を説明しようとするれば, 空演算子が *wh* 句を越えて移動していると考えにくいことから, 2つの連鎖は ($wh_i (op_j, t_j) t_i$)という構造になる。この構造は(17c)で示したように, 連鎖合成ができず, 寄生空所を認めない形である。したがって, Chomsky のやり方では主語内寄生空所は説明できないことになってしまう。

このことについて中村 (1994b) は, 心理動詞の目的語である経験者の項が, 論理形式で主語よりも高い位置 (IP付加位置¹⁰) に繰り上がるという経験者繰り上げ仮説を採用すれば, Chomsky の連鎖合成分析を最小限に修正するだけで, 主語内寄生空所が説明できることを示している。*Pictures of himself_i surprised John_i* という文を例にとると, 経験者繰り上げは以下の矢印のように示される。



経験者の繰り上げの概念は, Vと姉妹 (sister) 関係にある目的語の位置と, IP 付加位置を等価にするということである。この仮説を採用すると, 主語内寄生空所を含む(20a) (= (18a))における2つの連鎖の関係は, (20b)のようになる。

(20) a. Who_i do pictures of e_i bother t_i ?



経験者の繰り上げにより、IP付加位置に、*who* と同一指示の痕跡が存在することに注目されたい。これにより、IP 付加位置にある t_i と、 op_j との間に介在する障壁は DP のみとなる。前節で述べた Chomsky の連鎖合成の 0 下接条件を 1 下接と言い換えることができれば、(20) の構造においては連鎖合成ができることとなり、主語内寄生空所が説明できることになる。著者の知る限りにおいては、0 下接から 1 下接への変化は、何ら問題を生じない。

以上、経験者繰り上げ下接を採用し、連鎖合成の条件を 0 下接から 1 下接と変えることによって、主語内寄生空所を説明できる可能性を示した、中村 (1994b) の議論を概観した。以下では、2・3 章での先行研究をふまえ、中間態構文が寄生空所を認可する可能性があるとした Massam (1992) の議論を検証する。

4. 中間態構文における寄生空所について

Massam (1992) は、中間態構文を分析し、一旦は否定するものの、最後に中間態構文が寄生空所を認可する可能性があることを示している。

(21) a. ? This wall_i paints beautifully without double-coating e_i .

b. ? Chickens_i kill pretty easily, even without tranquillizing e_i first, but elephants sure don't. (Massam (1992: 133))

本章では、Massam の見解に反して、(21)は寄生空所を含む構文ではあり得ず、中間態構文は寄生空所を認可しないことを示す。

4.1 概念的な問題 (conceptual problem)

本節では、3章で述べたように、寄生空所は空演算子の移動した痕跡であり、これが認可されるのは、空演算子が移動した先が、他の A' 移動が残した痕跡と 1 下接であるときのみであると考えたと、Massam の議論が成立しないことを示す。

寄生空所が寄生する A' 痕跡は、必ずしも顕在的 (overt) な A' 移動によって残されたものばかりではない。例えば、(22a)の *tough* 構文と呼ばれる構文は、(22b)のような非顕在的 (covert) な演算子の A' 移動を含むとされており、それゆえ(23)のように寄生空所を認可できるといわれている。

- (22) a. These books are easy (for us) to file.
b. These books_i are easy (for us) [_{CP} op_i [_{IP} PRO to file *t_i*]].
- (23) These books_i are easy to file without reading *e_i*.

tough 構文同様、中間態構文には顕在的な A' 移動は見られない。したがって、中間態構文が寄生空所を認可することができるのであれば、*tough* 構文のように、構文内に空の演算子の移動が含まれていると考えなければならない。

ところが Massam は、中間態構文の構造として、次のような構造を提示している。(ec=empty category)

- (24) NP V ec. (cf: Massam (1992: 128))

Massam によると、ここでの *ec* は再帰的な意味を表す *ec* で、*tough* 構文のように空の演算子が移動した A' 痕跡ではないという。この(24)の構造は、(25)のように再帰形を許す例が存在することから導かれた構造である。

- (25) a. The floor_i practically washes itself.
b. The novels_i are so good, they_i almost read themselves_i. (ibid.: 130)

(24-5)の議論には、寄生空所認可に関して大きな問題があることは明らかである。つまり、このように *ec* が A' 痕跡ではないとすると、前章で述べた A' 痕跡に寄生するという寄生空所の最も顕著な特性を無視することになり、何らかの新たな寄生空所認可に関する説明が必要となってしまう。しかし、一切これについて説明はされていない。さらに、(25)の例文についても問題がある。それは、(25)のような再帰形を含む構文は、中間態構文ではないという議論があるからである。その代

表的なものは Fellbaum (1989) の議論である。紙面の関係上、詳しい議論は割愛するが、簡単に言えば、Fellbaum は (24) は中間態構文とも、能格 (ergative) 構文とも違う特性を有する構文であると述べている。彼女の議論は非常に明快であり、かなり信頼度が高いと思われる。もし Fellbaum が言うように、(24) の文が中間態構文ではないとすると、Massam の議論は中間態構文ではない構文から、中間態構文の構造を規定したこととなり、出発点から問題があることになる。

以上、本節では、Massam (1992) の中間態構文分析における概念的な問題として、構文内に A' 痕跡が存在しないのに寄生空所認可の可能性が示されていること、中間態構文内に存在する空範疇を規定する際の前提に問題があること、の 2 点を指摘した。

4.2 空所化 (gapping) の問題

本節では、(21) で提示された Massam の例文が寄生空所を含む文ではないことを述べる。まず、Massam が言うように、実際、中間態構文が寄生空所を認可しているようにみえる次のような例を検証したい。

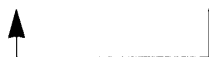
(26) Potatoes peel easily after boiling.

ここで注目したいのは付加詞内にある動詞の性質である。動詞 *boil* は、(27) のように、いわゆる自動詞 (intransitive)、他動詞 (transitive) 両用法を持つ、能格動詞 (ergative verb) である。

- (27) a. The chicken boiled.
b. We boiled the chicken.

主題役付与均一仮説 (uniformity of theta assignment hypothesis = UTAH)¹¹ により、自他両方の用法を持つ動詞の、自動詞用法の主語は、目的語位置から移動して充たされる派生主語であると考えられている。例えば (27b) は次のような移動によって派生される。

(28) [e] boiled the chicken.



(27-8) から、一見、付加詞内寄生空所を含む構文であるようにみえる (26) は、付加詞内の目的語位置から空演算子が動いた他動詞を含む文ではなく、名詞句移動 (以後 NP 移動) が起こっただけの自動詞構文である可能性が出てくる。このように考えると、付加詞内の目的語位置にある要素は、空演算子の移動した痕跡である寄生空所ではなく、NP 痕跡であることになる。

付加詞内においては、空演算子の移動によって残された変項 (variable) (= 寄生空所) と異なり、NP 痕跡は他の A' 痕跡が存在しなくても (29) のように認可される¹²。

- (29) a. These articles are filed t_i without being read t_i .
b. These articles disappeared without being read t_i .

このように、(26)の付加詞内には寄生空所が存在せず、NP 痕跡しか含まれていないと考えると、(26)の適格性は、Massam が言うように中間態構文が寄生空所を認可するからではなく、そもそも動詞 *boil* が自動詞であり、それゆえ寄生空所が含まれないからであると説明できる。

以上の説明が成立するためには、動詞 *boil* が他動詞用法ではないことを確証しなければならない。そこで、次のように中間態構文における付加詞節 (adjunct clause) 内の寄生空所の認可について考えてみた。典型的な寄生空所を含む構文では、(30)のように、付加詞節内に目的語位置が充たされ、間違いなく他動詞として使われている場合と、その目的語が空所化されている場合 (つまり寄生空所を含む場合) の、両方が適格な文となる。しかし、中間態構文の場合をしてみると(31b)のように空所化は許されない。

- (30) a. What $_i$ did you file t_i before you read them $_i$?
b. What $_i$ did you file t_i before you read e_i ?
(31) a. Potatoes $_i$ peel easily after we boil them $_i$.
b. *Potatoes $_i$ peel easily after we boil e_i .

(31b)で目的語を空所化できないことは、(27)の *boil* が自動詞であり、中間態構文が寄生空所を認可しない強い証拠となるように思われる。言い換えれば、一見、寄生空所が含まれているように見える(26)の中間態構文の例は、実は寄生空所が含まれない例であり、この文の適格性は中間態構文が寄生空所を認可するからではないと言えるわけである。

以上の考察を念頭に、Massam(1992: 133)で提示された例文に目を移すと、(26)の例文と同じ説明ができる。もう一度、Massam の例文をみってみる。

- (32) a. ? This wall $_i$ paints beautifully without double-coating e_i .
b. ? Chickens $_i$ kill pretty easily, even without tranquillizing e_i first, but elephants sure don't. (= (21))

問題となるのは付加詞内の動詞 *double-coat* と *tranquillize* である。(27)の *boil* と同様に、これらの動詞は自他両用法をもつ能格動詞である。

- (33) a. The wall double-coated.
b. He double-coated the wall.
(34) a. The chicken tranquillized.
b. He tranquillized the chicken.

さらに(30-31)のように，(32)の付加詞句内の動詞と同じ動詞を節内で使うと，(31b)同様，目的語の空所化は許されない。

- (35) a. The walli waxes easily before we double-coat it.
 b. *The walli waxes easily before we double-coat *ei*.
- (36) a. Chickensi tranquillize easily after we tranquillize them.
 b. *Chickensi kill easily after we tranquillize *ei*.

(35b)(36b)が非文となることから，Massam(1992: 133)が，中間態構文が寄生空所を認可する可能性があるとした例文は，いずれも寄生空所を含む文ではなく，中間態構文は寄生空所を認可しないと言うことができる¹³。

5. 結語

本稿では，まず中間態構文と寄生空所の特性を概観し，Massam (1992)の主張に反して，中間態構文は寄生空所を認可しないことを述べた。具体的には，まず，Massam が提示した中間態構文の構造には，A' 移動が含まれていないことを指摘し，これが寄生空所を認可することができない構造であると述べた。さらに，Massam が中間態構文において寄生空所が認可されているとしてあげた例文は，実は，寄生空所が含まれない，付加詞内の動詞が自動詞用法である文であることを示し，また，付加詞内で他動詞用法が確認された場合，目的語位置の空所化が許されないことから，中間態構文は寄生空所を認可しないという結論を下した。

(なかむら のりお 産業情報学科)

注

- (1)Chomsky(1981)(1982)の理念に基づく，原理とパラメータのアプローチ (principles and parameters approach) をとる理論。表示のレベルとしては，d-構造，s-構造，論理形式 (Logical Form=LF)，音声形式 (Phonetic Form=PF) の4つが仮定されている。詳しくは上述のChomskyの著作，原口・中村(1992)などを参照のこと。
- (2)K&R以前には，この構文を *activo-passive construction* と呼ぶこともあった。(Banchemo(1978)などを参照)
- (3)動詞等が選択する項 (argument) の特性を表したもので，この他に動作主 (agent)，経験者 (experiencer)，起点 (source)，着点 (goal)，道具 (instrument) などがある。詳しくは Jackendoff(1972)，Radford(1981)，Grimshaw (1990)などを参照のこと。
- (4)*tough* 構文の統語構造等については4.1節を参照されたい。また，*tough* 構文内に，空演算子の移動が存在することに関する詳しい議論は，Chomsky(1977)，(1982)を参照のこと。

(5)中間動詞の意味的特性に関しては、Hale & Keyser (1987), Takeda & Nemoto (1992)などを参照のこと。

(6)ほぼ義務的としたのは、中間態構文に副詞要素が必要不可欠であるかどうかについては議論が分かれているからである。義務的であるという立場をとるものには、中村 (1994a), K&R (1984), 澁川 (1991) などがあり、義務的ではないという立場をとるものには Fagan(1988), Hale & Keyser(1987)などがある。

また、中間態構文に現れる副詞の性質については、Fellbaum(1985)(1986), 中村 (1994a: 90-91)などを参照のこと。

(7)*some, many, every, each*などの数量詞 (quantifier) や、多重 *wh* 構文 (multiple *wh* construction) における *wh* 句も、作用域 (scope) を決定するために、論理形式 (Logical Form=LF) で A' 移動するという考え方があ。しかし、このような語を含む文は寄生空所を認可することができない。

(i) a. *John filed every book_i without reading e_i.

b. *Who filed what_i without reading e_i?

これらの非文法性を説明する方法として、2つの立場がある。ひとつは論理形式での A' 移動は、寄生空所を認可できないという立場であり、もうひとつはこれらの文において、作用域決定の際に、移動は生じていないとする立場である。詳しくは May (1977), Chomsky(1982), Engdahl(1983)などを参照のこと。

(8)c統御と、それに関連する支配 (domination) の定義は次の通りである。

(i) c統御

α が β を支配 (domination) せず、 α を支配するすべての γ が β を支配する場合、 α は β を構成素統御する

(cf: Chomsky (1986a: 162))

(ii) 支配

枝分かれ図 (tree diagram) において、接点 (node) Aが接点Bより高い位置にあり、かつAからBへ下に向かってたどってゆくことができるならば、AはBを支配すると言う

(原口・中村 (1992: 152))

(9)中村 (1996) を参照。

(10)経験者繰り上げの着地点 (landing site) についての詳細な議論は、中村 (1994b: 101) を参照のこと。

(11)同一の主題役を担う項は、D構造において同一の統語構造を持つとする仮説。言語習得の経済性という見地から、非常に重視されている仮説である。詳しくはBaker(1988)を参照。

(12)A/A' 移動に関しては、原口・中村 (1992: 29), 中村 (1996: 206)などを参照。

(13)次のような例文がいずれも適格な文になることについても、本稿での議論から簡単に説明できる。

(i) a. Potato peel easily without boiling.

b. Potatoes_i peel easily without boiling them_i.

(ia) (ib)を対比すると、一見、(ia)は目的語が空所化された寄生空所を含む文であるようにもみえる。これが Massam の誤解に結びついたと考えられるが、4章で説明してきたように、(ia)が適格なのは、*boil*が自動詞であり、寄生空所は含まれていないからだと説明できる。また、*boil*は自動詞・他動詞両用法を持つので、(ib)は他動詞として用いられている *boil* であると説明できるわけである。

参考文献

1. Baker, M. (1988), *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*. Chicago: University of Chicago Press.
2. Banchemo, L. (1978), *An Analysis of English Activo-Passive Sentences*. Doctoral Dissertation, University of Wisconsin.
3. Chomsky, N. (1977), "On wh-movement," in Culicover, Wasow, and Akmajian (eds.) (1977), 71-132.
4. Chomsky, N. (1981), *Lectures on Government and Binding* Dordrecht: Foris. 安井稔・原口庄輔 (訳) (1986), 『統率・束縛理論』東京: 研究社.
5. Chomsky, N. (1982), *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding* Cambridge, Mass.: MIT Press. 安井稔・原口庄輔 (訳) (1987), 『統率・束縛理論の意義と展開』東京: 研究社.
6. Chomsky, N. (1986a), *Barriers*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
7. Chomsky, N. (1986b), *Knowledge of Language: Its Nature and Origin and Use*. New York: Praeger.
8. Chomsky, N. (1993), "A Minimalist Program for Linguistic Theory," *The View from Building 20*, eds. K. Hale and S. J. Keyser, 1-52, Cambridge, Mass.: MIT Press.
9. Chomsky, N. (1994), "Bare Phrase Structure," *MIT Occasional Papers in Linguistics* 5, Department of Linguistics and Philosophy, MIT, Cambridge, Mass.
10. Contreras, H. (1984), "A Note on Parasitic Gaps," *Linguistic Inquiry* 15, 698-701.
11. Engdahl, E. (1983), "Parasitic Gaps," *Linguistics and Philosophy* 6, 5-34.
12. Fellbaum, C. (1985), "Adverbs in Agentless Actives and Passives," *CLS* 21, 21-31.
13. Fellbaum, C. (1986), "On the Middle Construction in English," ms., Indiana University Linguistics Club.
14. Fellbaum, C. (1989), "On the "Reflexive Middle" in English," *CLS* 25, 123-132.
15. Grimshaw, J. (1990), *Argument Structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
16. Fagan, S. (1988), "The English Middle," *Linguistic Inquiry* 19, 181-205.
17. Hale, K. & Keyser, S. J. (1987), "A View from Middle," *Lexicon Project Working Paper* 10,

Centre for Cognitive Science, MIT, Cambridge, Mass.

18. 原口庄輔・中村捷 (1992), 『チョムスキー理論辞典』東京: 研究社.
19. Jackendoff, R. (1972), *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
20. Johnson, K. (1985), *A Case for Movement*. Doctoral Dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
21. Kaneko, Y. (1995), "On *tough* Constructions: A GB Approach," ed. Akira Ikeya, *Tough Constructions in English and Japanese*, 9-41, 東京: くろしお出版.
22. Keyser, S. J. & Roeper, T. (1984), "On the Middle and Ergative Constructions in English," *Linguistic Inquiry* 15, 381-416.
23. Massam, D. (1992), "Null Objects and Non-Thematic Subjects," *Journal of Linguistics* 28, 115-137.
24. May, R. (1977), *The Grammar of Quantification*. Doctoral Dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
25. 中右実 (1991), 「中間態と自発態」『日本語学』vol. 10, 東京: 明治書院.
26. 中右実 (1994), 『認知意味論の原理』東京: 大修館.
27. 中村典生 (1994a), 「英語の中間態構文について」『土浦第一女子高校研究紀要』 vol. 1, 81-95.
28. 中村典生 (1994b), "Psych-Verbs and the Experiencer Raising Hypothesis," *Proceedings of the 7th Summer Conference 1993*, Tokyo Linguistics Forum, 87-106.
29. 中村典生 (1996), 「逆行的束縛再考」『つくば国際大学研究紀要』 vol. 3, 191-208.
30. Radford, A. (1981), *Transformational Syntax: A Student's Guide to Chomsky's Extended Standard Theory*. London: Cambridge University Press.
31. 澁川顕一 (1991), 「中間動詞用法, 能格動詞用法と疑似中間動詞用法: 機能的アプローチ」『英文学思潮』 vol. 64, 青山学院大学英文学会, 135-158.
32. Stroik, T (1992), "Middles and Movement," *Linguistic Inquiry* 23, 127-137.
33. Stroik, T. (1996), *Minimalism, Scope, and VP Structure*. California: SAGE Publications.
34. Takeda, K. & N, Nemoto (1992), "On Middle Constructions in English," paper presented at the 12th Annual Meeting of the Tsukuba English Linguistic Society.
35. Zribi-Hertz, A. (1993), "On Stroik's Analysis of English Middle Constructions," *Linguistic Inquiry* 25, 583-589.

Some Remarks on the Licensing of Parasitic Gaps in Middle Constructions

Norio Nakamura

The main purpose of this paper is to show that middle constructions do not license parasitic gaps contrary to Massam's (1992) analysis. This paper is organized as follows.

Firstly, some crucial properties of middle constructions and parasitic gaps are shown by reviewing some previous studies.

Secondly, I show Massam's (1992) analysis is inadequate in both conceptual and empirical grounds. More specifically the following flaws are pointed out;

(1) Massam's argument is inconsistent, because the structure of the middle construction shown in the article does not include A' trace which the gap is parasitic on, although he does not rule out the possibility of the parasitic gap being licensed in the construction.

(2) The sentences he cited in the article are not qualified as the examples of parasitic gaps. Each of the sentences does not include a A' trace but it does include a NP trace in the adjunct phrases, since these verbs in the adjunct phrases are ergative verbs and used as intransitive.

Lastly, my conclusion is that middle constructions do not license parasitic gaps.

Key Words: generative grammar, middle construction, parasitic gap